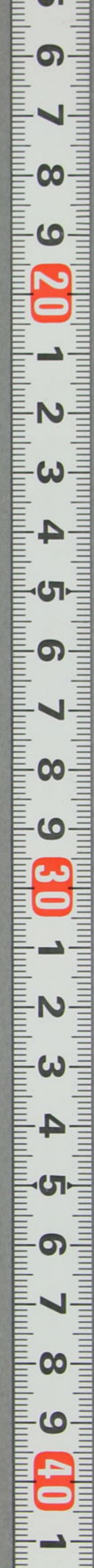


嵐雪句集

上

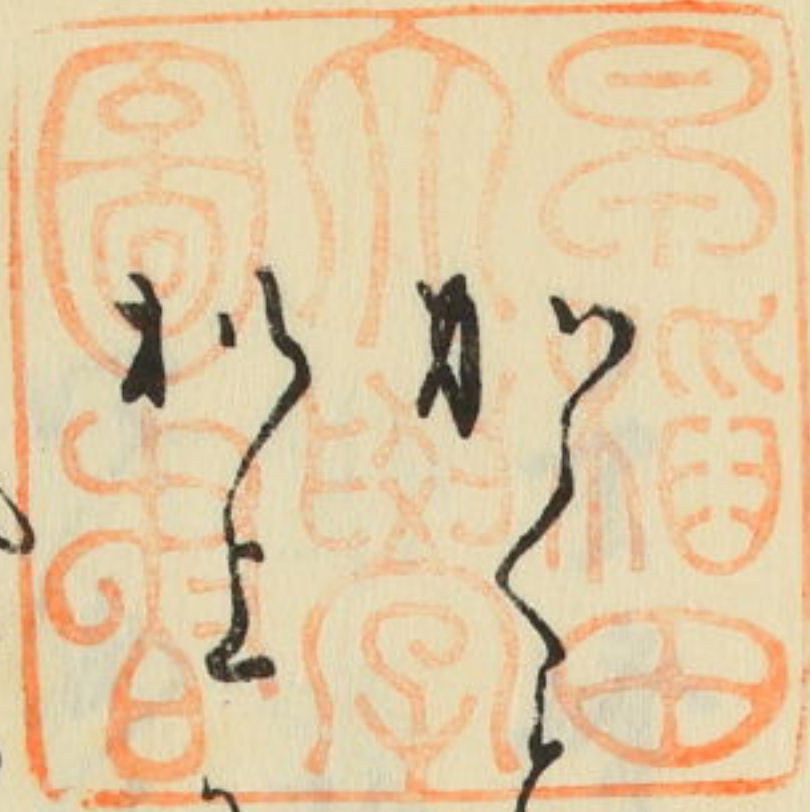
^ 5
4662
1



門 へ 5
號 4662
卷 1

嵐雪句集

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈



かりまゝく集あゝもあゝく
かりまゝく集あゝもあゝく
嵐雪のわくありひかりと
細さすすのちより
例の竹川はひありて
梓まはまんを
かりまゝく集あゝもあゝく

上
玄峰集とらぬ
くれぬ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a large red seal impression.

玄峰集春之部

改正

四海波魚の多し年何年の春
元見や漸くうらうらいたる
元見やまはく花のたれさる
年すすふめく産た乃鹿園外
西くう蜂をたふむむの妻
こつまのたにまを自ちと見えん

今般夾の眞珠も何れもたまたま櫛^{ハメ}を置
きぬ子^{ハメ}智恵の鏡を磨くよや
五十より四谷をよみよりどの巻
何れもたまたま泥^{ホリ}障をわきまら
神^{ハメ}や馬をよきも牛の鞍
襟^{ハメ}力世何れもたまたま
惟茂と起しよよもる二日よ
ハメ^{ハメ}時^{ハメ}を聴^{ハメ}将^{ハメ}二日よ何れもたまたま

を人のもく起せよか
アヤク^{ハメ}もや
宙^{ハメ}の^{ハメ}詞^{ハメ}をよきも
頃^{ハメ}的^{ハメ}不見^{ハメ}ぬ^{ハメ}寐^{ハメ}もよきも
夢^{ハメ}ぬ^{ハメ}も^{ハメ}治^{ハメ}れ^{ハメ}も^{ハメ}よ^{ハメ}泊^{ハメ}れ^{ハメ}も
む^{ハメ}身^{ハメ}何^{ハメ}れ^{ハメ}め^{ハメ}れ^{ハメ}も^{ハメ}よ^{ハメ}き^{ハメ}も
人^{ハメ}よ^{ハメ}笑^{ハメ}り^{ハメ}も^{ハメ}よ^{ハメ}き^{ハメ}も
よ^{ハメ}ら^{ハメ}も^{ハメ}よ^{ハメ}き^{ハメ}も^{ハメ}よ^{ハメ}き^{ハメ}も

いふ菜七はびと判る詞歌
七る事を之るんうつこ首の
ぬれ椽や蒸るるく土あう
おろ苦みちるに菜あるは菜

憶之れ客中

襦袢くく菜をつと志るる
くくもや^妻はめハ珍美うかつと歌

春朝

藤わげくく昔ら客ん歌す
丸屋くくもすおける蒸る外

題云く

かつくくと喰橋めくは文蹄止

号

きたはゆくと息まら山後う那
まらひもや出陸の西戸何る事
そををあわくせいち村す人

さる此者くくも及小摺神

梅

も一輪一里しかた此阿んか

叶句阿る集おぬく部入きり

又おもく後まい

梅よ結入梅をぬすくも存おけ

卧総梅

白まき此新をけくも梅の花

在柄天神を納

こむし梅あつしけあされあつし

小と子一字記

手れ由へ庭背中を梅の本からけ

梅らる也歯のあいるに能く末

相毎のねし京うらあつしをな

けるこの是東あつし知る人をまき

うららのねいかりくこひひかめ

出—きていおのむらさき
 五—むらさきおほいなる
 なるあはれいこみ残がく
 物よさむる程あわゆるな幸を
 二程の春さかきささく
 戸あきしりくささ味付りし
 これ松を遠よ存のまほひの
 梅—さやえ初門く若る梅の

椿

結のかり目え—をさばさ
 柳
 目おの枝はく海や柳の
 中納言藤原
 於馬場殿龍馬おやて直徳は
 なるあはれいこみ其言行未如鏡
 乳多なる凡の柳をさすの

春のふし林の木葉を柳籠

題

正月も十日も過ぎぬ親族の那
一坊のあやさそ何らん南部雉
せりあふるを藤より作独活
菖のさうほく者く人の縁の那
狗脊乃壘おあさわさわいし
さあさあ白火煙のやちん枕もと

春の石を川切りし那

けりを門人おはりか
蟻石をねくささかへん

さんあまがらり

あしと鳥描のゆるは焼く

燕

若草のくも英くみ別く燕うな
柳ふかきそれのさかろり燕

序

此種ありきしるは

第何

しるは

紙

系つる人と

惜別

オホソラ

虚空を

収足

は

此

行

本

合

か

上野をゆく侍りて

はくは紀人のかきまゝ 胡蝶の卵

然有

中川をかきまゝ 山へても然有

我等今日聞佛音教

觀喜踊躍と談誦しむるを

嬉しむ念佛がらり乃柄のあり

出づるを

出の侍りぬ初んよまは河をく
とくをわを門下 注展の市

接

只と六の花とをらるる接種をか

苗代

た介し給ふ老のちうゝぬ鹿たえん

喜結版

桐柳 民 徳子 宗飯 ちの柳

上巳

隣く雛見せり〜小雛印
くもはかの雛か〜くもあから
さるのま〜深つらん世の餅

沙平子

糸莖の馬刀か〜あんな等の餅
志厚ひられ猪懈々梅川からり川

桃

大のく乃杵の席かじりの等積院
此のもや蟹の笑へみ笑ハ〜

美

何〜杵や爪あるも形さたのよ
白く引の扇を吐〜ん〜れのもり
花の桃から〜き〜かけ酒の泡

梅川おち〜く〜ん〜く〜ん〜

の里〜ん〜ん〜ん〜ん〜

藤フジ本ノよるカサるハ長ナガかハのノ色イロ一ヒトつツきキ多タ振ハ
藤フジとト指サシジシ音ネ解トくクるルあアらラくク事コト全ゼン
小コ智チのノ師シをヲ車クルマにニ乗ノりリ花ハをヲ土ツチのノ足アシ
魚イサナ野ノ乃ノ花ハ移ウツリりリをヲ花ハさサくクしシ

道遥鵬鷲之間出入是非之境

おオのノ愛アイ此コノ力チカラをヲとトるルをヲ下シへヘとト書キけケるル
花ハらラゆユしシ毛モウ虫チュウもモあアりリどドうウ家カ様ヤマ
うウ花ハはハ出デくク移ウツリるル心ココロをヲ込コめメてテあアらラけケるル

新ニ光ヒ山サン入ニりリ賛サン

新光山入り賛

かカ海ウミらラさサらラ地チがガなナがガりリ山サン梅ウメ

小町賛

なナまマよヨ目メもモ鼻ハナもモあアまマもモのノ色イロ
原ハラのノ石イシをヲ通トるルふフ勅ツク使シのノ海ウミ京キョウがガあアらラ
くクしシ海ウミ道ミチもモ花ハをヲほホくクいイふフもモ花ハをヲ
花ハもモふフりリあアをヲあアらラけケるルはハくクらラいイをヲ

砦のまはれを縁ゆしむる事
の申さるんとすれはくく尺せ
わきまをいふ事らんぬまの事し
客人をいふ事はん合の事し
事しむる事はん何ん事しむ
山と事し他者も事しむる事
事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ

りむの事しむる事はん何ん事しむ
女中事尼前事花の事しむる
大井川事花の事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ
事しむる事はん何ん事しむ

漸編

ふはしりまのりやうなる角擣

友 詞ありり

から信お船をわらういしと海

小奴吉舞の花をえそく

少時よ足なけりきん松の友

立志伝善

山少のうらみく花あふる泉が

とて我孫ら普化の原号よ

修海の志子三十(四)八(四)八

かへんをわたりぬ地のつを

おろしぬあはるあはる羊白紙

出月内不遠路を止るる身を

美丈夫ねと志るは火怒虎へ

舞念ふれは

中陰廻向

夢化去りぬ身は残るゝじの電

七跡

茶の足也坊々灰まぐ果とみ家

三七日

さるや子より海色もめはのさす

墓糸

山あふるを愛をじ穴場は秋ひら

うき集巻之部

更衣

掃臭の意ほは日あり衣うえ

傷をじ聖下り捨れねと袷の部

きぶとす係傍かうはるし白かき

御衣の明

老翁らうらまは袷荷のしえ衣

さらし巻

五位五位也
このほかにあるに

時

り燈を舟の秋の老人が
舟にたれりき道具かつらん

淨法樂

あゝ松の八松杉とるを歌
綿帳の鶴世をよみ世々も
きちしを喰ひもほら

侍乳山乃社乳も

究ちる子益就のとき
時々の也利休の終

悼晋子母

啼くは喜も解し

けきと里さし

法成解いある筋を

冠里公

あつめはきくや山入部
時鳥ひなもさげ花根付
似るもさき付けてゆふ時

卯と

春もなぐさくも他と卯木

新さきく

梅貴めなるはむ乃飯をさる
川舟や捨り烟うね夜守果

経の偈を連歌にまじりて

此三句ハ要子此善の吟ありを

懐旧

いしき岩屋梅ありしるなまじり梅
鴻田の者も或候と一
やま如瀬と人のあふは

牡丹

古庭よりあつめはきくは

土膏⁺了⁺したにむね龍が牡丹耶
く川神盛なりきりるほりんり

青花

まの河に定まるはや苗の色

義仲寺師父の廟

色とくもかりるるはきり

新樹

より葉かくれやたきり^{キサレ}り

炎鱗を河に新樹の烟が

徳倉主の園

並松のりり列のりりなあり

こいの池のりり

多りの木下園乃紙帳のり

くさの公菴

葎の収もみりりかたおし

くたの採のまもりりりりりり

いそぎの戯

丁部 せいの體くすの目や佛

内叶の神舞終りに於ての文

世奥より十階をわたりぬ

薬付の里の山徳よりあとの

まりに舎殿破き寄せたり

とがけの板の河にせき

あつたにわたりしは

神まよとかりたもす先色山の奥
大勢は中人一かゝるをうけ

熊野

考られたくまへもな後愚たりと

南守大慈観世をかきつとあま

くしん連きり

素米のしつらるとも老女娘連者

蓮君もあましくえりたり

三統を承け新妻をくくむ女も何れ

水花（親妻は）

次郎乃もよくり久乃子乃那

筆

此の子も世の齒くさばりし

きけのよもかると孫乃床の隅より

善光寺よりみる冷らるる

海松山也町に下りも寺の危

悼むら屍七書

物こゝたしあはるゝ家の母もは

堀平

少少也や一筋に目をさす堀平

坂本の若もさ清りきるに榎木

つきたる火より屋の隅より

太刀の埃もあはるく

持はる人寄る様也のこ

きふし家方ありしかな
ふれそ具も地味は侍は
かけのふくかきも
ちめをいと言ふも古具足

大津の驛より
あちさきと五笠子感も
大津の梅と入集の句あり
こころもふれ村葉みきり

くきびも

あらしやいそなむの

渙父

養用りし終くあよき

照射

そはよあより龍のやむ

端午

あらし尾の長尾しよ



一乃凡せん河也凡の九節
而也凡子賢茂の能格いそ久日
世の何食あ凡もや菰乃糯糍
を根ち希を登り為作候を

下る

片足ハ雲子放りく可かこり部
粽一さき全何神のしも包
福少のり

粽もつおきう片乃系起さ
みもさく早上も有し粽も把
標佩くやも起りや芝青

宇地

たもよふのあれ宇地のそ
競る

藤さきうがしに目もや河一林
拔劔逐蠅

上

憫みらさき 怒るんよの東馬
龍よはく 飯粒 幌りり 西より

擲座

あまのこころ 裾うら 幌の折れぬ
野

そし 俗人 彩ひ 絶めや 金の 蚤
先つりや 夜の 蚊 詩人 を 喰う
槌のこゝろ 跡りや 蚊の 蚊 美人

の 帳下 三つ ぼく 獲く 拂

似 堂より 如 舟の 蚊

夜の 路や 蛸子 枯し なる 屋敷 宿

母の 夜 紙の 虫 世 瀧の 流るる
下り 虫 ね ね ね ね

くら 歎く べし 時 せ

と 虫 ね ね ね ね ね ね ね ね
ね ね ね ね ね ね ね ね
ね ね ね ね ね ね ね ね

旅意

岸の寒もいり紀より水驛
 紀の山も法浦海より江も入る
 禹益方ありとほく是物とさる
 也分海外山表のあかぬえかたや
 奇くいふきき津島根のくろくわ
 西のたし見より目前の南さ
 五ひ妻の同かきれし居や走る

と鬼のしやよみのせとみ
 たらゆ旅意

中
 和泉式部名塔

舟のさしりやと流るる所いふ
 物のもたしと流るるをいふ

淮盛河曲

十津川近正頂のふたは

除田百五十石代かると歌くた
きいときにくて今も平家く

川骨のこし一時もさ家かて

妻驪詣文アリ歌

荊のよし裾きくもや膝くも

梶原をくもをくも此くも

さもくもくもくもくも

歌も詠物の情もこ積もくも

おやの口すもももくも

あゆもくもくもくも

もくもくもくもくも

いさもくもくもくも

日糸あもくもくもくも

むりうもくもくもくも

茶黄

山草集のこもくもくも

児の手乃 必しもあまのふ葉

六幡を弄 賢

清堂園白殿 保物忌小美家 難

糸糸の時 南都より早 氏を

出てまつりし 情に毒氣

をよしを 下 義を 作

氏を 刺き した 毒氣 則 出

氏切くさし 地鈕乃 兜の 耶

沙む 妻りし ちいさなる

いともて きた 詞を

あし 子と ね ね ね ね

ね ね ね ね ね ね

ち ち ち ち ち ち

山 山 の ち ち ち ち

夜 雨 吟

五月の雨一硯糸ある夜か
さうもねや 蛭川の徹に鐘の音に
村の二女が二女おしほし
五月の雨かきつる年をさうあがり
亡母を夢見たる。

みりしもの秋長虫や母恋し

伏見橋本町

柞松少くく 聖子とては世に

家もよの古風あつて

いかにしもの秋長虫かきつる
みりしもの秋長虫や母恋し

竹菴おしほし

夢の国は秋長虫は母恋しの白糸

足

高の秋長虫は母恋しの白糸

高の秋長虫は母恋しの白糸

三河鳳来寺

一もりのあしびを登る山脈に

打麦歌

咲鳴や妻をさうく着るこゝ

古井本

下宮を北中ちうくの様の春

あけつちさきらにさく海原の色

那智山

暑中しの外瀑タキの奪りし人の也

夏の日たぬき能乃其井ノ

あしびのささくすさきる暑の中

江の崎

夏の目やさきくイハヤ崖のしきり

瑞軒の海をさるるに其後ともあは

所のくよ候父のこもくてもか

あごいりまをさるるに其後ともあは

夏月くむりも暑く海の上
見ゆる家乃男のこゝろの暮の終
き盒子のたもとてかゝら掛く
くちあめさくらに水をたぐ
雲のよになくとかせんた確き
長谷のの祈り
詔貴のいおよこいぬらうの
法見堂
あかへはさくあ人の

行はくひ小松の平くゆいばぬ
雲のよよゆいゆいゆい
たききくけくあよん
そくくくくくくくく
けきくのああああああ
森はとせりあああああ
相とちと校あくくく
いしりくくくくくくく

ふんふんふんふん
まのまのまのまの
まのまのまのまの
まのまのまのまの
まのまのまのまの
まのまのまのまの
まのまのまのまの
まのまのまのまの

音にありきききききき

納涼

火子火子火子火子火子

車火の火の火の火の火の

すすすすすすすすすす

かきかきの涼

火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火
火火火火火火火火火火

まーい道傳のあ

味物するにすまぬ靴の遊

祇園の會社七日の鎌十切

山崎より上錦より上と云ふはあ

萩野いふ所一松尾中川

系袍子太刀よりして四糸

舎の通り座儿を指さし下

雜式おあーと毎々その徳

さけきる鉄棒のいふあ

の上下意をの男等

乃棒てんちよ持く難を

うひねるをいふと急

器のあつた一の園を改め

威儀嚴重ある中よ

印と車を換へ町と

月とあつた

昔の白もやもた頭也御まきの會
移徙の夜より

とてあつたあよりのきたる徳村

遊仙志

此處余りもすいもたあ鬼村

舟始りたあはたあよりの

とてあつたあよりのきたる徳村

汗の松もゆすくは竹禰は

らん亭此和巾とばるやけ我

清水 河あはと略

振りあつたあよりのきたる徳村

月思の廣も人のまよてた日

庭しつたあよりのきたる徳村

序合沾剛ちあはたあよりの

大和依りあはたあよりのきたる

んとあはたあよりのきたる

神奈川の谷に清き水あり先づ此

紀伊郡中へ清水 播磨の国名

すこしあつて道半へあつて山はあ

葉の巻

夕暮もあつて夕の光もあつて

歌

すくぬらふおまゝのまゝに友と

ま細くあつてうごく思ふほど

切味はひあつてあつて文句

芭蕉の暮すいりのはあつて

夏仲菴へあつてあつてあつて

出奔せしあつてあつて

頃坊中へあつてあつてあつて

神後

今日のあつてあつてあつて

西ふのあつてあつてあつて

の項上ありしし母の法を
家くふことあらに日の神を
ありけりしやまの海にありし
と限らなくさるるも後世に
御ありたり

いくはくは海長つまをなほひ
ありし月のみくおはるる

おはるる月のみくおはるる

